

令和7年度作品集

平和 コンクール



第25回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立湖畔小学校3年 山本 乃愛 さん

釧路市平和都市推進委員会

< 目 次 >

【第25回平和絵画コンクール】

最優秀賞	湖畔小学校3年	山 本 乃 愛	1
優 秀 賞	愛国小学校1年	柴 田 羽 宙	
優 秀 賞	愛国小学校1年	萱 野 叶 希	2
優 秀 賞	鳥取西小学校3年	村 上 すみれ	
優 秀 賞	愛国小学校4年	柴 田 千 星	3
佳 作	鳥取西小学校1年	柴 野 進次郎	
佳 作	清明小学校4年	阿 部 葵	4
佳 作	愛国小学校3年	笠 島 綾 人	
佳 作	湖畔小学校1年	横 澤 希 海	5
佳 作	美原小学校5年	田 口 凜	
佳 作	愛国小学校4年	阿 部 環	6
佳 作	鶴野小学校4年	島 崎 斗 碧	

【第38回平和図書読書感想文コンクール】

最優秀賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	山 瀬 一太郎	語り継ぐ惨禍	7
優 秀 賞	景雲中学校1年	黒 滝 琴 音	記憶を記録に～平和のバトンを読んで	9
優 秀 賞	共栄中学校2年	和 田 あやめ	喪失の中のかすかな祈り	11
優 秀 賞	美原中学校2年	佐々木 琴 未	私が思う平和	13
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	角 晃 丞	戦争のない世界に向けて	15
佳 作	景雲中学校3年	大 谷 百 音	平和のバトン	17
佳 作	幣舞中学校3年	川 田 紗 世	私たちの「使命」	19
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	山 下 愛里咲	「平和」と「幸せ」を願って～永井さんが教えてくれたこと	21
佳 作	幣舞中学校3年	板 倉 紬	「いしぶみ」が教えてくれたこと	23
佳 作	阿寒中学校2年	安 田 愛弓実	原爆について	25
佳 作	音別中学校2年	鈴 木 想 来	この瞬間に感謝	27

【第24回平和の主張コンクール】

最優秀賞	釧路湖陵高校2年	青 戸 愛 唯	平和のメロディー	29
優 秀 賞	釧路工業高校3年	樋 浦 心 花	平和と戦争	31
優 秀 賞	釧路工業高校3年	山 本 空	戦争と平和	33
優 秀 賞	釧路工業高校2年	渡 邊 真 那	平和と戦争の違いと共通点	35
佳 作	釧路工業高校2年	佐 藤 愛 翔	戦争と平和	37
佳 作	釧路工業高校2年	田 中 陽 真	戦争と平和	39
佳 作	釧路工業高校2年	木 村 琉 聖	戦争と平和について	41
佳 作	釧路工業高校2年	中 村 翔 馬	戦争と平和	43
佳 作	釧路工業高校2年	佐 藤 柚 月	戦争と平和	45
佳 作	釧路工業高校2年	川 本 創 也	平和と戦争	47
佳 作	釧路工業高校3年	伊 藤 歩 夢	戦争と平和について	49
佳 作	釧路工業高校3年	十 川 該 大	無理難題	51

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞） 湖畔小3年 ^{やまもと}山本 ^{のあ}乃愛 さん



優秀賞（釧路市議会議長賞） 愛國小1年 ^{しばた}柴田 ^{うそら}羽宙 さん



優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞） 愛国小1年 ^{かやの} 萱野 ^{かのん} 叶希 さん



優秀賞（釧路青年会議所理事長賞） 鳥取西小3年 ^{むらかみ} 村上 すみれさん



優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 愛国小4年 ^{しばた}柴田 ^{ちほし}千星 さん



佳作 鳥取西小1年 ^{しばの}柴野 ^{しんじろう}進次郎 さん



佳作 清明小4年 ^{あべ}阿部 ^{あおい}葵 さん



佳作 愛國小3年 ^{かさじま}笠島 ^{あやと}綾人 さん



佳作 湖畔小1年 ^{よこざわ}横澤 ^{のぞみ}希海 さん



佳作 美原小5年 ^{たぐち}田口 ^{りん}凜 さん



佳作 愛国小4年 ^{あべ}阿部 ^{たまき}環 さん



佳作 鶴野小4年 ^{しまざき}島崎 ^{とあ}斗碧 さん



第38回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

語り継ぐ惨禍

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{やませ}山瀬 ^{いちたろう}一太郎

「原爆」・「戦争」それは果てしなく未来へと繋がる悲しみの足跡であり、誰もが知るべき繰り返しを許さぬ誓い。

はだしのゲン「わたしの遺書」を読んで私は原子爆弾の恐ろしさと、戦後を生き抜こうとする人々の強さについて深く考えさせられた。この作品は、広島に原子爆弾が投下された直後の悲惨な状況の下、主人公のゲン（著者である中沢啓二さん）が絶望的でもん底の中でも生きる力を見出し、平和の大切さを訴えている。また、原子爆弾によって一瞬の内に命を奪われた人々や残された者たちがどれだけの苦しみを受けたのか、更にその後の復興に向けた人々の奮闘を描いている。

まず、私には作品を通じて何度も強く感じた事が二つある。

一つ目は原子爆弾の恐ろしさである。ゲンが爆心地近くで見た風景は、想像を絶するものであった。「地獄」という言葉さえ生ぬるく思える描写が続いていく。焼けただけた皮膚が垂れ下がり、水を求めて彷徨う人々の姿は、読者である私の胸に深く突き刺さった。

二つ目は、戦争をする事の無意味さだ。作中にこんなセリフがあった。「水をくれ…。」これは被爆した人々が口にする最後の願いであり、その切実さと無力感が作品全体に重くのしかかっている。命の象徴である水が、死の寸前でさえ与えられない現実には戦争の非人間性を改めて感じた。更に、たとえ被弾を逃れ生き延びたとしても、被爆者にはひどい後遺症が残る。放射線による影響は目に見えず病と化し、長く苦しむ人々が数多くいる。作者の母親もまた、後遺症に苦しんだ一人である。母親の死後、遺体を火葬すると、遺族が拾える骨はほとんど無いほどであった。生きている人間の骨に侵入し、食い尽くし、スカスカにしてしまう放射線とは本当に恐ろしいものである。戦争はその瞬間だけではなく、その後も人々の生活を永遠に蝕み続けるのだと痛感した。

「人間はこんな事をしてはいけない。」という言葉も印象深かった。原子爆弾を投下した側がどんな意図を持っていたのか、そしてその結果として全く罪のない数えきれない人々の命が奪われた事を考えると、戦争の恐ろしさに言葉を失ってしまう。このように多くの命が奪われた事は、戦争を忘れてはならない理由の一つだと強く感じた。

しかし、この作品の中で描かれているのは単なる悲劇だけではない。ゲンは、絶望的な状況の中でも決して希望を失わず、前向きに生きようとしていた。父親が戦争に反対

して逮捕されたり、兄弟を失ったりする中でも、「生きるんだ。」というゲンの強い決意が何度も繰り返されるのだ。この言葉に私は力強さと人間の可能性を感じた。たとえどんなに過酷な状況に置かれたとしても、人は未来を切り開く力を持っているのだというメッセージがまさに伝わってくる。これは、今後の私たちが大切にすべき心の在り方だと思う。

この作品は、単に戦争の悲惨さや原子爆弾の恐ろしさを描くだけではなく、命の大切さや生きる力の強さをも教えてくれる作品である。私たちが今、どれだけ幸せな環境に生きているか。そして、原子爆弾のような恐ろしい兵器が二度と使われぬよう、戦争のない平和な世界を築くために、私たちがどのような行動をとるべきなのかを考えさせてくれた。また最近では、「日本被団協」がノーベル平和賞を受賞し、核廃絶に向けた動きが強まっているが、持続可能なエネルギーとの両立も求められている。

広島や長崎での経験は、核兵器の使用による人類への脅威を強く印象付けている。その一方で、エネルギー問題の解決策として原子力発電を取り入れる必要性も現代社会では生じている。

しかし、現在は核兵器と同じ技術が人々の生活に不可欠になっているのも事実である。一見すると、核＝根絶、原子力＝有効利用は矛盾していることのようにも思える。しかし、核兵器の廃絶とエネルギーの持続可能性を両立させる方法を考えていく事も、今後の課題の一つだと私は思う。

そして、もう一つ、今も世界各国で起きている戦争。これらの事を自分たちがどう考えて、具体的にどのように取り組み、どう発信していくかがとても重要になってくると思う。

私も、これから社会に出た時、核問題やエネルギー問題、そして、人々が戦争の無い平和で安定した暮らしが出来るようになるためには一体何が必要なのかを真剣に考えていきたい。それは、私たち使命でもあると思う。

書 名：はだしのゲン「わたしの遺書」(著 者：中沢 啓治)

第38回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

記憶を記録に～平和のバトンを読んで

釧路市立景雲中学校 2年 黒滝^{くろたき} 琴音^{ことね}

「将来について語りあった子どもたちだっていたにちがいありません。そんな子どもたちの生活も未来も、そして夢さえも、一発の原爆は、またたくまにたたきつぶし、無惨にも消し去ってしまったのです。」

これは、「平和のバトン～広島の高校生たちが描いた八月六日の記憶」という本に記された筆者の言葉である。私はこの本を読んで、記憶を記録に残すことは難しいけれど、未来に原爆が落ちた歴史を残すことが大切だと考えさせられた。その理由が二つある。

一つ目の理由は、原爆の恐ろしさを知らない人たちが増えてきたという事実があるからだ。この本が書かれた二〇十九年で、直接被爆した人たちは三万人ほどで広島市の全人口のわずか二、五パーセントになっているそう。平和を続けていくには、この記憶を残していく必要がある。平和ではない時代を、私たちは知らない。知らないということは、再び繰り返してしまうかもしれないという危機感をもって記憶を未来へつないでいかなくてはいけないと思う。

二つ目の理由は、未来に向かって進むためには、過去を振り返ることも大切だと考えるからだ。今の日本には原爆が落とされた歴史がある。世界で唯一の被爆国だからこそ、世界に訴えることができるはずだ。だが、そんな日本なのにもかかわらず、原爆の歴史が日に日に薄れ、過去の過ちを未来へとつないでいくことができているということが問題なのだと思う。これから先、直接被爆をした人たちは確実に減っていくし、いつかはなくなってしまうだろう。だからこそ、今、過去を未来へつないでいくことが必要なのだと思う。

この本を読んだあと、今私たちの世界では核兵器による被害が再び出してしまうリスクがあるのかをインターネットで調べてみた。そこでわかったことは、今もなお核兵器が世界で増え続けているということだ。アジアの国々も核兵器を保有することで、自分の国を守ったり仲間の国を守ったりしようとしているのだ。たくさんの国が核兵器をもつことで、戦争のリスクが高まり、被害が大きくなってしまう。ある調査によると、アメリカと中国が対立してしまうケースでは二百六十万人もの人がなくなるという推定もあるそう。広島、長崎で亡くなった人はそれぞれ十四万人、七万人だったといわれているが、その数をはるかに上回る想定だ。東京でテロが起きた場合は二

十二万人もの人が亡くなることもあった。ほかにもロシア・ウクライナ戦争のように敵国の原子力発電所を攻撃するケースや、テロリストのサイバー攻撃による核兵器の誤作動など、心配される危機がどんどん高まっているとのことだ。

このような状況はあってはならないことだからこそ、唯一の被爆国である日本が核兵器の恐ろしさを世界に訴えて、未来につなげていかなければならないと思う。未来に原爆が落ちた歴史を残したいと活動している人がたくさんいる。私もそんな人になりたいとこの本を読んで考えさせられた。一人でも多く、同じように感じ、世界平和について真剣に考えてくれることを願いたい。

書 名：「平和のバトン～広島の高校生たちが描いた八月六日の記憶」（著 者：弓
狩 匡純）

第38回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

喪失の中のかすかな祈り

釧路市立共栄中学校 2年 和田^{わだ} あやめ

——焼けた空にも、きっと青はあった。

そう思ったとき、私は涙をこらえられなかった。

原民喜さんの『夏の花』『心願の国』を読んだのは、かすかに春風が吹く肌寒い午後だった。風の音がヒューヒューと響く静かな部屋で、私は「被爆で亡くなった方の叫び声」を聴いた気がした。それは爆音でも銃声でもない。言葉にならない喪失の声。誰にも届かない祈りの残響。それこそが、原民喜さんの作品が持つ最大の力だった。

『夏の花』で描かれるのは、突如投下された原子爆弾によって一瞬にして破壊された日常だ。黒こげの人々、焼け落ちた街、そして愛するものを失った者の静かな絶望。読み進めるたび、私は「生き残る」ということの苦しさを知った。最もつらいのは死ぬことではなく、誰かの死を抱えて生きることなのだ。

とくに心に刺さったのは、語り手が最愛の妻とやっと再会し、しかしその翌日に再び別れる場面だった。声をかけ、手を握り、希望をつかんだかに見えたその瞬間が、再び無惨に奪われる。私はページをめくる手を止め、ただ空を見つめた。「これはフィクションじゃない。誰かが本当に体験したことなのだ。」

その苦しみは、『心願の国』でも形を変えて語られる。死者の言葉を聴くような幼想的な世界。その中にあらわれるのは、穏やかで、静かで、しかし深い嘆きと祈りの声たちだ。「誰も、死にたかったわけじゃない」——その声は私の胸を撃った。彼らの願いは、「過去に戻る」とではなく、「未来を信じる」と感じた。

『夏の花』が現実の地獄を描いた記録文学だとすれば、『心願の国』は死者の魂と対話する祈りの文学である。原民喜さんは、戦争に怒りを爆発させたり、声高に平和を叫んだりもしない。ただ、静かに、ひとつひとつの事実と向き合いながら、「これを、忘れないでほしい」と語りかけてくる。その声は、今の時代を生きる私たちにも確かに届いている。

私はこの二作を読み、平和とは「ただ戦争がない状態」ではないことを学んだ。平和とは、失われた命の願いを、静かに引き継ぎ続ける営みのことだ。語り、記録し、未来へつなぐ。その一つひとつが、祈りのような行為なのだと思う。

これから私は、誰かにこの本のことを語りたいと思っている。「こんな本があったんだ」「こんな祈りが残っていたんだ」と。そして、たとえ小さな声でも、それが次の誰

かに届いていけば、原民喜さんの祈りは未来を生きる私たちの中で、決して、決して消えないと信じている。

——焼けた空の下にも、確かに青はあった。

その青を、私たちは守らなければならない。

書 名：「夏の花」・「心願の国」（著 者：原 民喜）

第38回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

私が思う平和

釧路市立美原中学校 2年 佐々木 琴未^{ささき ことみ}

私は今回、平和の実現において必要なことを考えるために、『ある晴れた夏の朝』という物語を読みました。この物語は、八人の色々な国の高校生たちが広島と長崎の原子爆弾投下について、肯定派と否定派に分かれてディベートし合う内容です。

このテーマについて肯定派のある人の意見は、「原爆を落とさなかったら戦争は終わっていなかったかもしれないし、もし戦争が続いていたら原爆での死者数よりも、もっと多くの死者数があったかもしれない」という内容でした。これに対して、私は多くの人の命が失われるので悲しい気持ちになりました。人の命は勝手に奪ってはいけないと思うので戦争自体してほしくないと強く思いました。否定派のある人の意見は、「日本に原爆を落としたのは、根底に『人種差別』があるから」というものでした。もし本当に「人種差別」が根底にあったのなら、私は、その差別のせいでたくさんの命が亡くなったことに対して改めて「差別はいけない」と深く感じました。現在も「人種差別」の被害にあっている人がいるとしたら、その人を救えるような人間になりたいです。私が平和のために必要だと思うことは、三つあります。

一つ目は、広島や長崎の原爆投下についての本を読んで思ったことであり、「人種差別は絶対にしてはいけないということです。なぜなら、一つの「人種差別」でたくさんの人の命を奪うことになる可能性があるからです。つまり、戦争のもとにつながってしまう可能性があるということです。肌の色、目の色、髪の色、言語が違って何がいけないのでしょうか。私は、人それぞれの個性があって良いと思います。お互いの個性を認め合えば「人種差別」はなくなるのではないかと私は考えています。

二つ目は、お互いの意見を理解し合うために話し合うということです。お互いの意見を理解しないと誤解が生まれ、戦争が始まってしまうかもしれません。例えば、あなたは友達と意見が食い違ったらどうしますか。私なら、まず、相手の意見を詳しく聞きます。なぜなら、相手の意見を尊重したいからです。そうすることで、自分も相手も嫌な気持ちにならず、話し合いを進めることができます。

三つ目は、過去の出来事についてよく知ることです。原爆投下などの出来事をよく知ること、同じ歴史を繰り返さないよう気をつけることができると私は考えています。

私は、いままで平和について真剣に考えたことがありませんでした。さらに、第二

次世界大戦について正直よく知らなかったです。今回、『ある晴れた夏の朝』という本を読んで過去に起きた出来事について調べてみようと思いました。調べることで、平和について考えを深められると思います。

書 名：「ある晴れた夏の朝」（著 者：小手鞠 るい）

第38回平和図書読書感想文コンクール
佳作

戦争のない世界に向けて

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{かど}角 ^{こうすけ}晃丞

私が今回読んだ本は、原民喜作、「夏の花」です。この本は、広島で被爆した原民喜が、経験したことの全てを書き尽くした物語です。

まず、この作品の主なあらすじを説明します。第二次世界大戦によって日本は大きな被害を受けました。特に広島では空襲の他にも、原爆が投下され一瞬でたくさんの人が亡くなりました。現在、日本は世界で唯一の被爆国にもなりました。その当時の暮らしや、戦後での出来事を鮮明に事細かく書かれた物語であり、六つの短編物語によって構成されています。

この六つの短編物語の中で、私が一番心に響いたのは、「夏の花」と「破滅の序曲」の二つです。この二つはどちらも家族について多く触れられることが多く、家族を失ったり家族間での争いなどが起き、読んでいて自分まで悲しくなることも多くありました。他にも、人の死体が道端に何十体とある場面や、日に日に人が亡くなっていく場面なども多くありました。これらは想像するだけで、胸が苦しくなるようなものばかりでした。また、このようなことが本当に日本で起こっていたとは思えませんでした。戦争によって身の回りの人が亡くなっていく中、生きていくために気持ちを切り替えて生活し、なんとか日々の生活を取り戻そうとする場面もあり、当時の人々の悲しさと強さを知ることができました。

次に、私がこの本をきっかけに考えたことを説明していきます。戦争による被害、原爆による被害への恐ろしさもそうですが、戦争が起こる前の至って普通の生活が、戦争が起きて、空襲や原爆によってこの当時の人々の暮らしが一瞬で消える、という恐ろしさに私は驚きました。それと同時に、私たちが今、何事もなく生活できていることがどれだけすごいことなのか、衣食住に困っていないことへの感謝やありがたみを忘れずに生きていこうと考えることができました。また、現在は昔よりはるかに科学や経済が進化しています。そして今生きている多くの人は戦争を経験したことがありません。そのため今、日本や世界各地で戦争が起きたらどうになってしまうのだろう、昔の人のように行動できていたのだろうか、なども思いました。私は戦争とは最大の人権侵害であると思います。自分の大切な人の生命や健康を奪い、それにより精神的にも傷つき、大事なもののや財産も無くしてしまうからです。

戦時中に亡くなった人はもちろん、戦後も放射能による後遺症が多発して、苦しみ、亡くなった人大勢いたと思います。この戦争以外でも、東日本大震災では、地震により

福島第一原子力発電所で放射能が漏れ出す事故もありました。母親が妊娠している状態で放射能を浴びると、その赤ちゃんが胎内被爆する恐れもあります。放射能にはこのような恐ろしさがあります。そのため、放射能の恐ろしさを知ることと、扱いに気をつけることが大事だと思いました。最後に、広く社会に目を向けて、「平和」ということについて考えていきたいと思います。残念ながら現代でも、戦争や紛争は世界中で起きています。核兵器も世界で一万三千四百発もあると考えられています。核兵器のほとんどは、ロシアとアメリカが保持しています。ロシアとアメリカが核弾頭を解体していることにより少しずつ核兵器の数は減っていると言われています。戦争や紛争などがこの世界で起きないように、世界が平和になるために私たちが今、できることは何かあるかな、と考えました。私の意見はいくつかあります。貧困や経済状態の悪化、生活レベルや経済格差などが戦争の引き金になっています。世界中から貧困がなくなれば戦争の可能性は低くなるので、募金やボランティア活動を積極的に行う必要があると思いました。次に、相手のことを尊重することです。私は、日常生活で相手のことを考えずに行動して、喧嘩になっていたり、相手が悲しんでしまう、などのケースを見たことがあります。「世界」という大きな観点で見た時には、文化の違いにより戦争が起きるケースも多々あります。そのため、相手の文化や意見を尊重することが大切だと考えました。世の中が平和であり続けるために、他者を理解し多様性を受け入れる心構えと、相手を尊重し行動することを意識して、これからの日常生活を過ごしていこうと思います。また、父と祖父が広島出身であり、私にとっても原爆は身近なことであることに気づきました。そして、この本をきっかけにもっと原爆や戦争、放射能などについて知りたい、と思うことができました。

書 名：「夏の花」（著 者：原 民喜）

第38回平和図書読書感想文コンクール

佳作

平和のバトン

釧路市立景雲中学校 3年 おおたに もね 大谷 百音

一九四五年八月六日 午前八時十五分。あの日、あの場所で何が起こったのだろうか。私は「広島原爆」について二冊の本を選んだ。

一冊目は「水平線のかなたに」というロイス・ローリー著者が書いた本だ。この本では著者が子供の頃の記憶や思い、長い年月を経て知った事実について記されている。

私はこの本を読んだ時、味わったことのない新鮮さを体感した。なぜなら被爆者の名前や特徴が綿密に書かれているからだ。一例を挙げると、「赤い三輪車」という題名でテツタニシンイチさんが登場している。

「その日の朝シンイチは赤い三輪車で遊んでいた。父さんと母さんが見つけたとき、シンイチはまだハンドルをにぎっていた。父さんと母さんはシンイチを庭に埋めた。シンイチが『トモダチ』といていた三輪車も一緒に」シンイチはもうすぐ四歳になろうとしていた。この時の両親の気持ちや衝撃はどのようなものだったのだろうか。

被爆者達は、原爆を体験して終わりではない。私たちには想像もできない恐怖が襲いかかってくる。放射線による後遺症、家族を失った悲しみ、原爆に対しての思い、様々な悪夢を見てきた。

赤い三輪車はその後、四十年の月日を経て小さな骨と共に掘り返された。お骨はお墓へ三輪車は資料館に置かれている。

著者は、原爆の他に船艦アリゾナの事についても記している。一九四一年十二月七日日曜日の早朝、日本の戦闘機がハワイの真珠湾を攻撃した。

あれから八十四年。今でも船体の暗い割れ目からは油が漏れ、海面に泡が立っている。日本人観光客が船艦アリゾナを見下ろし、深く深く頭をたれる。著者は広島の資料館にある黒くなった三輪車の前で深く深く頭をたれる。長い年月が過ぎて出会い、たがいの心のわだかまりを理解しあうまで友達にはなれなかった。

一九四五年のあの日、エノラ・ゲイに乗っていた十二人の男達は、爆弾を落とした後、「神よ、われわれはなにをしたのですか」と問いかけていた。一人の命令でたくさんの命が奪われた。

この本は人と人のつながりや、心理について深い学びをくれた一冊だ。

二冊目は「原爆投下・10秒の衝撃」というNHK広島「核・平和」プロジェクト著者が書いた本だ。この本は原爆投下の十秒間に注目している。「0秒から百万分の一秒、

「百万分の一秒から三秒」、「三秒から十秒」、「十秒から現在」という四つの項目に分けられている。

一つ目の「0秒から百万分の一秒」では、最初の攻撃「中性子」や「放射線」の影響について記されている。0秒から百万分の一秒の間に、人々はたくさんの放射線を浴びた。0秒から百万分の一秒の間で浴びた放射線の量で人々のこれからの人生を大きく変えてしまった。

二つ目は、「百万分の一秒から三秒」の瞬間だ。ここでは「火球」や「衝撃波」について記されている。火球は太陽の一千倍よりも明るく見え、証言者達は口を揃えて「白いマグネシウムのような閃光」だと語っている。その後、爆風の被害に遭う人が後を絶たなかった。

三つ目は、「三秒から十秒」の七秒間だ。ここでは、被爆者達の実話が細かく記されている。熱線による影響で着物の柄が皮膚に写ってしまい、大火傷を負った写真があった。皮膚がでていた部分は皆、黒く焼け焦げてしまっていた。

四つ目は、「十秒から現在」だ。ここでは被爆者達の現在について記されている。原爆で亡くなってしまった人の数の詳細は不明という現実や、遺族の下に帰れていない遺骨がたくさんあるという事実が綿密に書かれている。

今回の読書を通して私は、原爆に対しての見方が変わった。今までは、被爆者や広島に対して目を向けることが多かったが『原爆』に対する両者の過程を知ること、過去だけでなく、これからの日本について考えていくことが大切なのだと身にしみて感じられた。被爆者は、原爆を体験して終わりではない。希望を持ち続けたのだ。今の私達にできることは、現実と事実を忘れず、これからの広島、日本、世界に希望を繋げていくことだと強く思う。

世界中の人に幸あれ、という願いを込めて。

書 名：「水平線のかなたに」（著 者：ロイス・ローリー）

「原爆投下・10秒の衝撃」（著 者：NHK「核・平和」プロジェクト）

第38回平和図書読書感想文コンクール
佳作

私たちの「使命」

釧路市立幣舞中学校 3年 川田^{かわた} 紗^さ世^よ

「戦争」を聞くこと。それは、今を生きる私達にはひどく難しいことです。なぜなら、こうしている間にも、原爆の被害に遭い、それを伝えてくれる人は減り続けているためです。被爆者の平均年齢は年々上がり続け、直接話を聞くことが難しくなっています。そんな現在で、原爆のことを忘れないために必要なのは、過去に話を聞いた人の「思い」を知り、それを「伝える」ということだと思います。そして、それを手伝ってくれるのは本なのです。

私が読んだのは、『綾瀬はるか「戦争」を聞く』です。この本は、学校の先生がおすすめてくださったものでしたが、私はこの本を読むことが出来て良かったと感じています。なぜなら、実際に話を聞くことがどれほど大切なことなのか理解できたからです。この本の中で、十代で被爆された二人の女性のお話が載せられています。小坂千世子さんと阿部静子さんです。そのうちの一人、小坂さんは十二歳のときに被爆されました。当時、爆心地から一キロの自宅にいた小坂さんは、爆風で飛んできたガラス片が体の百ヵ所以上に突き刺さりました。足には、えぐられたような跡が残り、体内からもガラス片が見つかりました。幸い一命は取り留めたものの、放射線を防ぐことを出来ませんでした。後遺症では歯茎から血が出たと語っていました。小坂さんの母は、どうしたら良いか分からず、小坂さんの口から流れる血をお椀で受け止めていたのだそうです。一体どれほどの恐怖と困惑に襲われたことでしょう。もう一人の被爆者阿部静さんは、火傷の跡が異常に腫れ上がるケロイドを発症しました。十八歳のときに被爆した阿部さんは、九つ上の軍人、三郎さんと結婚していました。ほどなくして三郎さんは満州に出征、義母と二人で疎開作業をしていた時に、悲劇は起きました。爆心地から一・八キロの場所にいた阿部さんは、熱線を浴びたのです。半袖シャツの下から見えていた肌は剥けて垂れ下がり、顔も腫れて瞬きすらも難しくなっていました。そんな中、探しに来た父と再会しましたが、父でも阿部さんなのか判別が難しいほどの火傷をおっていて、何度も「あんたが静子か」と確認されたといいます。そして、助けられた阿部さんは生死を彷徨い、三ヵ月経ってやっと起き上がることが出来たのです。しかし、顔はニホンザルのように赤くなり、父も「あの時に死ねていれば」と言うほどひどい状態でした。その年の末に夫の三郎さんが帰ってきましたが、阿部さんの両親は「結婚したときとは全く違う醜い顔になってしまったので離婚してください」と言いました。しかし、三郎さん

は、「私が戦争で手足を失っていても、静子さんに面倒を見てもらおうと思って、それを心の支えにして戦ってきたんで、日本が戦場になって、妻が傷ついたからといって離婚するわけにはいきません」と言ったのです。これに、阿部さんは感激して嬉しかったと語っていました。ところが、火傷のケロイドは悪化し、計十八回手術をしたそうですが、阿部さんが願った体になることはありませんでした。一体どれだけの絶望と苦痛を味わったことでしょう。

他にも、たくさんの被爆者の方々にお話を聞いていました。また、綾瀬はるかさんは質問をしすぎないように気をつけているように感じました。取材を受けた方々の中には、あまり当時のことについて話してこなかった方もいました。苦しかった過去を思い出したくないと思いがあるのでしょう。あまり深掘りせず、その人の「思い」を聞くことが、その人の「戦争」を知ることなのだなと思いました。そしてその、「思い」を間接的にでも知り、語り継いでいくことこそが、戦争を経験せず、話を直接聞くこともままならない私達が「戦争」を忘れずに繰り返さないための使命なのでしょう。

書 名：「綾瀬はるか「戦争」を聞く」（著 者：TBS テレビ『NEWS23』取材班）

第38回平和図書読書感想文コンクール

佳作

「平和」と「幸せ」を願って～永井さんが教えてくれたこと

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{やました}山下 ^{あ り さ}愛里咲

原爆。それは無惨で残酷なものだった。

1945年8月6日、広島に約4トンもの原爆が投下された。私は「この子を残して」という本を読んだ。この本の筆者、永井隆さんは、この原爆により被爆したうちの1人だ。

永井さんは放射能専門医師、および放射能の研究者だった。彼の放射能への興味と熱意は人一倍だった。毎日研究に打ち込んでいた彼は、放射能の浴び過ぎにより、白血病と診断され、余命3年と告げられた。だが彼は、それでも放射能の研究を続けた。それが彼の生きがいであり、たった一つの使命だったのだ。また彼には1人の妻と4人の子供がいた。家族6人で毎日を楽しくすごしていた。そんな時だった。彼に悲劇がおきた。午前8時15分、突然彼の目の前は眩しい光と激しい音に包まれた。原子爆団が投下されたのだ。彼と彼の子供たちは幸い無事だったが、彼の妻は即死だったという。彼はそこで初めて知ることになる。原爆は一瞬で人々の幸せを奪っていくものなのだと。

この「この子を残して」という本は段落に分かれており、その中でも1つ、普通だったらあり得ない言葉が書いてあった。「死ぬほうがよい」という言葉だ。ここの段落では、筆者が医者として被爆した子供たちを診察した時の様子が描かれている。彼は当時、2人の子供を診察した。2人とも被爆により、助かる道はなく、ただ死を目の前にして死んでいったという。その時彼は、被爆のせいで毎日後遺症とたたかいながら辛い思いをして未来を生きていくのならば、家族がいる空の上で幸せに暮らしたら良いのではないかと思ったのだ。だが彼はふと考えた。もし、自分の子供たちが死を待つだけの状態になったらどう思うだろうか。親は普通、子供がどんな状態であろうと1日でも長く生きてほしいと思うのが普通ではないか。自分たちのいる場所に、今すぐにでもきてほしいと思うわけがない。と。彼はその2人の子供のことを、死ぬまで考えることになったのだ。それだけではない。彼が一番考えなければならなかったのは自分の家族のことだった。彼は白血病と被爆により、彼の子供、「かやの」は医者から「お父さんに近寄ってはけません!」と言われていた。母を被爆で亡くしたかやのは、愛情を父から受け取るしかなかったにも関わらず、自身の父にも近寄ってはいけないと言われてしまったのだ。一体かやのはどんな気持ちだったのか。そのかやのの様子を死ぬまで見続け、それをよく一番知っていたのが、筆者、永井隆さんだ。かやのは、永井さんの布団を押入

れから出し、匂いをかいでいたのだという。さらには、寝ていた永井さんの隣に座り、永井さんの頬に自分の頬をそっとくっつけ、「ああ、、、お父さんの匂い、、、」と言ったのだという。永井さんは愛する娘を抱きしめたくてたまらなかった。だがそれすら叶わなかった。原爆は、被爆した人だけではなく、被爆した人々の家族までもを巻き込み、罪のない人々の「幸せ」を次から次へと奪っていくのだ。

彼はその後も放射能の研究を続け、何冊もの「本」という形で、今も私たちに原爆によって他界していった人々の、言葉だけでは言い表せないような悲しみや、その人々の取り残される家族への気持ち、「死の惜しさ」を訴え続けている。

私はこの本を読んで、筆者が最後まで願っていた「平和」について、自分には何ができるのかを考えてみました。戦争は結局、何のために、誰のためにやる必要があるのか。私たちが一生考えていかなければならない問いなのかもしれない。こんな戦争を、もう二度と繰り返してはいけない。そのために、国々の文化を尊重し、困っているときは助け合い、互いに認め合うべきだと思います。そして永井さんのように、自分に与えられた才能を見つけ、世のため、人のために充分に発揮し、自分たちの手で、世界の「平和」をつくりあげていきたい。

書 名：「この子を残して」（著 者：永井 隆）

第38回平和図書読書感想文コンクール
佳作

「いしぶみ」が教えてくれたこと

釧路市立幣舞中学校 3年 ^{いたくら}板倉 ^{つむぎ}紬

「いしぶみ 広島二中一年生全滅の記録」は、被爆した三百二十二人の広島二中一年生が全滅するまでの原爆被害を、被爆者や遺族の声とリアルな記録で伝える本です。広島二中の一年生の名前や顔写真、伝票の裏に書かれた日記の生々しさに、読む間はずっと胸が苦しかったです。彼らは私と同じ中学生なのに、なぜこのような恐怖を味わったのか、川で「お母ちゃん」と叫ぶ声や、生徒の母の歌の

「烈日の真上にありて八月は 腹の底より泣き叫びたき」
は、戦争の悲惨さと平和の尊さを深く刻みました。この本は、私に平和を守る意味を教えてくださいました。

本書の中で特に心に残ったのは、

「日本の、広島のお母さんたちは、これが最後の別れになるとも知らずに、わが子を送り出しておりました。」

の一文です。この一文は、戦争がどれほど突然に、平凡な日常を奪うのかがわかります。朝、笑顔で子どもを送り出したお母さんたちが、その数時間後に永遠の別れを迎えるなんて、想像するだけで言葉を失います。この一文に続く本書の描写は、さらに心を抉りました。爆撃機エノラ＝ゲイ号と、真正面から向き合う位置にあった広島二中の一年生たちは爆発直後に閃光に目を焼かれ、服は燃えだし小さな体は地面に叩きつけられ吹きとばされました。地面の砂すら燃えだし、唯一の逃げ場である川に向かう生徒の中には、石段の途中で息絶える者もいました。

川の中で、お母ちゃん、お母ちゃん、と叫ぶ生徒。「和歌」「海ゆかば」「君が代」を歌い、友を励ました生徒たちの声。泳ぎのできない生徒が、「ぼくらは先に行くよ」と万歳を叫んで川下へ流れていった姿や、水にもぐって、そのままあがってこない友だちも多かったという被爆者の証言は、あまりに悲しく生々しさを感じ、読み進めるのが辛かったです。

次に生徒たちを待っていたのは、家族との再会と別れです。その夜の広島では、被爆した生徒を探す親族で溢れかえりました。西村正照さんの母と兄が、「正ちゃん、正ちゃん」と大声で呼び叫びました。

「お母さんが来たのよ。わかる……」「ウン」「お兄さんもいるのよ……」「ウン」
「家に帰ろうよ……」「ウン」

と全身が焼かれた西村正照さんが小さく答えた姿にひどく心を抉られました。佐伯群にある平良村へたどりついた生徒には、肉親の名を呼びつづけ死んだものや、三日間くるしみぬき、うわ言にB29をやっつけろ、勝て勝て日本、と叫んだり、最後は何度もお母さん、と言いながら死んでいった生徒もいました。あくる朝、川土手では、遺体を探し当てた親の咽び泣く声が絶え間なく続いていたそうです。

広島二中の生徒を襲った悲劇は、夜を明けても終えることができませんでした。本書で最も心を抉られたのは、「そして全滅した」という章のタイトルです。家にたどり着いた子どもたちにも死期が近づき、ある母は

「玄関にすわりこんだまま、涙もでませんでした」

と語りました。

「ぼくがなおったら、きつとかたきをとってやる」

と言って息を引きとった生徒もいました。山下明治さんの母は、

「お母ちゃんもいっしょに行くからね」

と言うと、明治さんは

「あとからでいいよ」

と答え、

「お母ちゃんにあえたからいいよ」

と言って亡くなりました。始めに引用した彼女の歌の、

「列し日の真上にありて八月は 腹の底より泣き叫びたき」

は、戦争が奪った全てを凝縮しています。

そうして、本土手川に整列した広島二中一年生、三百二十二人と四人の先生は、ひとり残らず全滅しました。

この「いしぶみ 広島二中一年生全滅の記録」という本を読み、戦争の恐ろしさと命の尊さが心に深く刻まれました。同年代の子どもたちがこんなに苦しい思いをしているのを知り、読んでいる間はずっと胸が苦しかったです。「亡くなった」「息を引き取った」

「死んでいった」という言葉が何度も繰り返され、被爆した生徒の名前や顔写真、遺族の手紙の生々しさに息がつまりました。目次のタイトルすら胸に刺さり、広島二中一年生三百二十二人人全滅の事実は、戦争の無慈悲さを突きつけます。でも、この衝撃こそが、二度とこんな悲劇を繰り返してはいけないと再確認させてくれました。平和の大切さを次の世代に伝え、歴史を学ぶ続けることが私たちの使命だと感じました。

書 名：「いしぶみ碑 広島二中一年生全滅の記録」（著 者：広島テレビ放送編）

第38回平和図書読書感想文コンクール
佳作

原爆について

釧路市立阿寒中学校 2年 やすだ あゆみ
安田 愛弓実

あなた方は、「原爆を最初に研究した国」を知っている、もしくは、どこの国だと思
うだろうか？アメリカ、アドルフ・ヒトラーがユダヤ人を大量虐殺したドイツなどだろ
うか。この問の答えは「日本」だ。

日本で最初に研究したところは、「理化学研究所の仁科研究室」という所だ。ここに、
話をもちこんだのは航空技術所長・安田武雄中将だ。中将が早くから雑誌などに発表さ
れた核分裂に着眼し、航空本部付きの鈴木三辰郎中佐に研究を命じたのがスタートだ。
原子物理学のメッカ・仁科研究所で徹底的に研究されたのは、原子核分裂と爆弾の研究
についてだ。このことを徹底的に研究したことで課題点が発見された。

それは、原子爆弾製造困難さだ。化学的性質が同一であれば、科学的な処理では分離
が不可能。当然、物理的な方法が考えられなければならなかった。原子爆弾製造の困難
さとは、要するに、きわめて困難だといわれる同位元素を物理的に分離するということ
だ。

そして、原子核分裂一つ一つについて二〇〇億ボルトというエネルギーが、一瞬にして
放出される。ということは、強力な圧力が生じられ大爆発をおこすということだ。原子
爆弾を軍事利用する条件は、原料がある量以上に一ヵ所にまとまっていること、形が扁
形ではなく球型に近いこと、放出される中性子を、遮断する障害物がないこと。これら
を満足させれば可能になる。仁科博士は、自分ひとりだけで聞いたが、行動に移そうと
はしなかった。そして科学者はまだ、動き始めている。

私は、「行動に移そうとしなかった。」と「動き始めている。」という所に疑問を思
った。なぜ、仁科博士は聞いたが行動に移さなかったのだろうか？それは、設備が足りな
いのか、研究するためのお金が少なかった、もしくは、国から規制されていたのだろう
か。

国から規制されていたのであったなら、研究室に話は通されないし、研究を命じられな
いはずだ。では設備が足りないのであったなら？私は、これに対し確かにその可能性は
あると思う。なぜなら、当時の日米関係は険悪していたからだ。関係が険悪していたな
ら、それ程多くは、設備や道具を輸入しないと思う。そして、研究するお金が少なかっ
たなら？私は、その可能性は低いと思う。なぜなら、メッカ・仁科研究室に日本の物理
学会をリードする頭脳といわれる程なら、実力に対するそれ相応の金額を研究室に渡す

と思うからだ。

二つ目の疑問は、「動き始めていない。」という所だ。大きく動き始めていなくとも、すぐに動けるようにしていなかったのだろうか？そこまで、日本の研究者は深く考えようと思わなかったのだろうか？原爆をもし、現実で完成することができ、日本に落とされた時に、どこまで被害が広がり、死傷者数がどの位になるのかを軽く見積もらなかったのだろうか？この二つ目の疑問に対し、私は、たくさんの疑問がうまれた。

私は、この二つの疑問に対する答えは、分からないし、当時の人たちの考えも、当時の情勢も詳しくは知らないし、分からない。

そして、研究者のひとたちが、何を思い、何を考えて、研究していたのかも。

だけど、その事を想像することは、私達にはできる。その想いを、考えを、周りの人に伝えることで新しい考え方ができるかもしれない。私は、ずっと、その考えを大切に、とは思わないし、否定しない。その考えを、頭の隅にでも置いておけばいいと、私は、思う。

今一度、原爆について考えてみてはどうだろうか？自分の考えを交流するおもしろさや、楽しさが分かるかもしれない。そして、交流することで新しい考えができるかもしれない。

書 名：「原爆が落ちた日」（著 者：半藤 一利・湯川 豊）

第38回平和図書読書感想文コンクール
佳作

この瞬間に感謝

釧路市立音別中学校 2年 ^{すずき}鈴木 ^{そら}想来

「助けてーッ」とあちらこちらで悲鳴が上がっている。これを聞いて、あなたは思うだろうか。きっと、「怖いな」などと思う人が多いだろう。私もこの本を読む前は「怖いな」と、しか思わなかったはずだ。だが、この本を読むことで、「助けてーッ」という言葉への印象が一気に変わった。

ある日、図書室に行き本を見ていた。その時、一際目立ったタイトルの本を見つけた。それが、「もういやだ 原爆の生きている証人たち」というこの本だ。

この本は、昭和三十一年八月九日に長崎で行われた第二回に向けてまとめられたもので、原爆を受け、家族をなくしてしまった方々や、原爆の後遺症で苦しんでいる方々の心情が綴られている。

私は、この本を読み、三人の方の被爆体験記が特に印象に残った。

まず、印象に残ったのは「直美と生きる」という被爆体験記に書かれていた原爆の怖さだ。これは、原爆の爆心地に近い、城山小学校に勤めていた方が書いたものである。私は、これを読み、「いつもの日常」や「幸せ」が一瞬のうちに消えてしまう怖さや悲しさが身に染みた。だからこそ、この過去を次の世代に伝えていくことが改めて大切だと感じた。

次に、印象に残ったのは、一歳の頃に原爆で父をなくしてしまった方が書かれた、「お父さんが生きていたら」という被爆体験記だ。この体験記を書かれた方は、小さいころということもあり、あまり原爆を受けた時のことを覚えていなかったそう。このように、小さい頃、原爆で大切な家族をなくしてしまった方々が居るということを知った。そして、私は、今、この瞬間を生きれていることが普通ではなく、とてもありがたいことだと感じる事ができた。

最後に、印象に残ったのは、「原爆を作る人々に」という原爆を作る方々に向け、書かれたもので、「原爆を作る人々よ！」という言葉に続き、真っ直ぐな思いがかかっていた。私は、これを読み、原爆というのはもう二度としてはいけないものであり、大勢の方達の幸せを一瞬で消してしまうものということを再確認することができた。

この本を読み、私は、「幸せ」のありがたみをととても実感することができた。今、この瞬間を生きれていること、毎日楽しく過ごせていることなど、これまで当たり前だと思っていたことも実は、とてもありがたいことだと感じる事ができたからだ。そし

て、私はこの「幸せ」のありがたみを次の世代の方達にも伝えていくことが大切だと思った。だからこそ、原爆の怖さなどから逃げずに、ありのままの形で次の世代の方達へと語り継いでいくことが必要不可欠だと思った。

私は、この本に出会うことができなければ、「幸せ」のありがたみなどに気づくことができなかったはずだ。だから、私はこの本に出会うことができて本当によかった。

書 名：「もういやだ 原爆の生きている証人たち」（著 者：長崎原爆青年乙女の会）

第24回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

平和のメロディー

北海道釧路湖陵高等学校 2年 ^{あおと}青戸 ^{めい}愛唯

『平和への祈りは深く 紫の鶴を折る

野の果てに埋もれし人に 黄色い鶴折りたたみ

水底に沈みし人に 青色の鶴を折る』

これは、被爆から五十年を迎えた平成七年に「長崎を最後の被爆地に」という思いを込めて作られた合唱曲『千羽鶴』の歌詞の一部です。長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典にて、毎年大切に歌い継がれています。

私は、中学二年生のときに、釧路市被爆地訪問市民代表団の一員として、長崎で開催されている青少年ピースフォーラムに参加しました。その際、犠牲となられた方々のご冥福を祈り、平和の実現を願って、仲間達と『千羽鶴』を歌いました。素敵な歌詞とメロディーに心を奪われました。今も、私はこの曲が大好きです。

長崎の地で、私は素敵な友達、そして、優しいピースボランティアの先輩方と出逢うことができました。平和について考えることができ、かけがえのない幸せな時間となりました。平和とは何か・争いをなくすためにはどうしたら良いのか、意見交流を行いました。実際に戦争を体験していない世代の私達に何ができるのか、簡単に答えを出すことは難しいですが、平和を願い、発信していくことに意味があるのではないかと考えます。

今年で日本は、戦後八十年を迎えます。戦争を経験した方々は段々と高齢化しており、かつての日本の悲惨な状況を直接知っている人は、急速に少なくなっているそうです。このままでは、想像もできないほど残酷で、悲しい出来事が「戦争」という単純な言葉で片付けられてしまうのではないかと、とても不安です。そこで、私は、学校の探求の時間で、平和の大切さを訴えかける活動を行おうと考えています。「平和で楽しい毎を送るのが当たり前」と思っている今だからこそ、平和について考えるきっかけを作らなければならないと考え、現在、準備を進めています。学生や大人のみならず、小さな子供たちにも「今」を過ごしていることの素晴らしさを知ってもらいたいです。楽しいだけでなく、忘れてはならない過去の記憶を繋げていかなければならないと思います。今の私たちがあるのは、過去に、日本のために命を尽くしてくださった方々の努力があったからです。その事実をしっかりと心に留め、後世に伝えていきたいです。これからは、私たちの世代が、平和の尊さを世界に訴えかけていく時代であると強く感じています。

合唱曲『千羽鶴』の結びには『未来への希望と夢を 虹色の鶴に折る』とあります。もう二度と、日本、そして、世界に戦争が訪れてはなりません。

戦争によって奪われるのは、人々の命だけではなくありません。戦争を経験した人々も、これから先、戦争の歴史を知ることになる人々も、辛く、悲しい思いをして、心まで壊されてしまうのです。

未来で、私たちは「戦争」ではなく「平和」のことを考えられるようになって欲しいです。『千羽鶴』の歌のように、誰も悲しむことのない世界が早く訪れることを願ってやみません。

第24回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

平和と戦争

北海道釧路工業高等学校 3年 ^{ひうら}樋浦 ^{ここな}心花

平和と戦争人類の歴史は、平和と戦争の繰り返りで彩られてきた。古代から現代に至るまで、戦争は国家間の対立、宗教や民族の衝突、あるいは領土の拡張など、様々な要因によって引き起こされてきた。一方で、戦争の悲惨さや人々の苦しみを経て、多くの人々が平和の大切さを痛感し、それを実現しようと努めてきた。戦争とは、武力を用いた国家間または国内の衝突であり、多くの命が失われ、生活基盤が破壊される。第二次世界大戦では、日本も含め、数千万の人々が犠牲となった。広島や長崎に投下された原子爆弾の惨状は、現在でも世界に対して核兵器の恐ろしさを訴える象徴となっている。

戦争は、ただ単に軍人同士が戦うものではなく、無関係な市民、特に子どもや高齢者までもが巻き込まれる悲劇だと私は思う。

日本は第二次世界大戦後、平和憲法を制定し、「戦争の放棄」「戦力の不保持」「交戦権の否認」という三原則を掲げた。これは、日本が再び戦争の道を歩まないという強い決意を示すものであり、現在でも日本の平和主義の基礎となっている。この憲法の理念のもと、日本は自衛のための最小限の防衛力を保ちつつ、国際社会における平和貢献活動にも積極的に関わってきた。一方で、現代の国際情勢は依然として不安定であり、世界各地では内戦やテロが続いている。国家間の利害対立、宗教対立、民族問題などが複雑に絡み合い、戦争の火種が絶えない。また、最近ではサイバー戦争や経済戦争といった、武力を伴わない新たな形の戦争も登場している。こうした状況下で、私たち一人ひとりが平和について考えることの重要性は増していると私は感じた。

平和とは、単に戦争がない状態を指すのではなく、人々が安心して生活でき、自由に意見を述べ、教育を受け、健康に過ごせる社会の実現を意味することだと思う。平和な社会には、対話と理解、そして互いを尊重する心が欠かせない。国と国との間だけでなく、家庭や学校、地域社会の中でも、他者との対話を大切にし、争いを避ける姿勢が求められると思う。特に日本の私達、若い世代にとって、戦争の記憶には年々薄れていく傾向がある。しかし、歴史を忘れれば、同じ過ちを繰り返す危険性がある。だからこそ、学校教育やかていでの語り継ぎ、資料館の見学などを通じて、戦争の悲惨さと平和の尊さを学び続ける必要がある。平和を維持するためには、他国との協調だけでなく、国内の不平等や差別、貧困といった社会問題にも目を向けなければならない。こうした問題を放置すれば、人々の不満が蓄積され、やがては衝突や分断を生む原因となると考えた。真の平和とは、外的な戦争の回避だけでなく、内面的な安定と公正の確保をも含んでい

ると思えた。

最後に、戦争のない世界を目指すことは容易ではないけれど、決して不可能ではない。そのためには、私たち一人ひとりが平和の担い手であるという自覚を持ち、日々の生活の中で思いやりと対話を大切にすることが求められる。平和は与えられるものではなく、築いていくものである。この認識を胸に、未来の世代に平和な世界を引き継いでいきたいという思いを大切に生きてほしい。

第24回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 3年 ^{やまもと}山本 ^{そら}空

私は「戦争と平和」この二つの言葉を聞き戦争がある限り、平和はずっと来ることはないのではないかと思います。

実際はそのようなことはありませんでした。現に今の日本では、過去に戦争があったにもかかわらず、緑がたくさんあり、人との関わりもたくさんありとても平和で豊かな暮らしができています。

そのことに対して私は、日本だけに関わらず、世界中で過去に大きな戦争があったのに今争いがあまりなく平和な暮らしが出来るのだろうか、そう考えたときに、一つの答えが出ました。

それは、世界中の人々が争いのない、みんなが仲良く協力し合える世に仲がいいと考えているからだと思います。とても安直な答えですが、みんなが負の感情を出さず、相手の意見を尊重し笑顔で毎日を楽しく過ごせる、このようなことができるだけでこの世の中が平和だということがわかります。

日常生活でも、戦争まではいきませんが、争いごとが生まれ、例えば、友人との対立だったり、価値観の違いです。

人間誰もが同じ意見を持っていたりするわけではなく、一人ひとりの意見があり、その意見が食い違った場合に争いごとが起きてしまいます。

このようなことが起きてしまっても、悪い方向に進め続けず平和に事を済ませる方法があり、一番良い方法は相手の意見も尊重してあげることです。

戦争や、争い事が一向に収まらない理由は、相手の話に聞く耳を持たないことです。

相手の意見を聞き入れることで相手との共感性が生まれ、争いごとがなくなり平和に繋がり、戦争が起きることはないと思います。

ですが、世界的に見てみるとこのようなことが話し合いだけでは通用しないことがあります。

国の問題や、宗教的な問題での戦争が多くあり、一般市民も巻き込まれ多くの人々が亡くなってしまうような現状であり、このような場面では先程の聞く耳を持ってもらえるような状態ではありませんし、これでは平和をただ願うだけで平和を実現することもできず、ただひたすらにどちらかが降伏するまではこの状態は終わりません。

そんな状態でも巻き込まれた人々同士で協力し合うことが出来、戦争が終わるまでに助け合いをし、終戦すればみんなとの協調性で直ぐに復興をすることまで修復するこ

とが可能になります。戦争はあってはならないことですが、みんなが一丸となってより良い方向に持っていかうとする考えが生まれるのはみんなが希望を持っているということなので、諦めない力にも繋がります。

人々が窮地に立った時の怒りや不安、喪失感があってこそ人々が支え合う力が話し合い以外の別の解決策を生み、より良い方向に進んでいき平和への一歩となっていきます。

戦争は絶対にしてはいけないことですが、戦争があり平和が訪れ、今の世界があり、それが教訓となっていきます。

今までの戦争で起きたことが二度と起こらないようにこれからの未来に平和な希望を持ち続けて生きていきたいと私は思いました。

第24回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

平和と戦争の違いと共通点

北海道釧路工業高等学校 2年 ^{わたなべ}渡邊 ^{まな}真那

皆さんは、平和と戦争の違いと共通点について考えてみたことはありますか。私が思う、平和と戦争の違いは、戦争は1つで、平和はたくさんあるという事です。共通点は、平和はも戦争も、私利私欲から始まり、私利私欲で終わることだと思いました。

平和と戦争の違いを、いろんな人に聞いてみたところ、戦争は、戦場にたって命尽きるまで戦うという人が、とても多かったです。辞書の中では、互いに自国の意思を相手国に強制するために、武力を用いて争うこと、と解説されていました。

はたして戦争とは、それだけでしょうか。戦争は、現実起こった惨劇です。私が思う戦争は、命を奪い合う行為だと思います。

私は、戦争が1つとは限らないと、思いました。今、この戦争が、終わった時代にも関わらず、殺されている人やいじめられて、自殺する人など、沢山の人が人間関係で、死に追い込まれています。これは、戦争ではないと言う人が、多いと思いますが、人の命を奪う行為をしている人が、居ます。無自覚で、あろうがなかろうが、人が、人のせいで死んでいる現状。小さな戦争が、今でも、続いていると、私は思います。

平和は、沢山ありました。人それぞれの平和があり、すべてが素晴らしい平和でしたが、平和なんてないという人もいました。平和について辞書で調べてみると、戦いや争いがなくおだやかな状態の事でした。

私が思う平和は、努力できる人が、平和な場所を作るのかな、と思いました。

私は、努力している人に人は集まってくると思いますが、努力をしている人に、引っ張られて、努力しようと思う人や、自分もその人と同じように頑張ろうと思う人、または、その人以上に、努力する人も、いると思います。ですが、必ずしも、みんながそう思うわけでは、ありません。平和とは何でしょうか。皆が必ず笑顔になることはないですし、お金があっても平和になることはないと思います。どうしてでしょうか。どうして人は、平和な世界を、皆で作ることが、できないのでしょうか。人がいる限り、平和な世界になることはないのでしょうか。私は人それぞれの考えがあり、それをすべて理解出来なくても、少し理解していく努力をしていけば、平和な世界が出来ると思っています。1人1人が平和な世界にして行こうという努力も必要だと思いますし、人の上に立つ人達は、平和にするために努力しないとイケないと考えます。最後に平和と戦争の共通点です。戦争は、正義と正義のぶつかり合いで始まります。どちらかが、妥協をす

るか負けるかで、戦争は終わります。それでも、戦って死んでいった人達にも、家族や大切な人がいます。そして、その家族や大切な人との大事な時間は戻ってきません。平和は、自分が平和だと思わない限り、平和が始まることはありません。そして、平和の終わりは、誰かによって急に崩れることもあり、自分の行動で、平和が終わることもあります。なので、平和も戦争も、私利私欲から始まり、私利私欲で終わると思います。人は、かけがえない、代わりがきかないものだと思います。だからこそ命は、奪い合うものではなく、守り合っていければ、平和だなと思う人が増えてくるのではないかと、私は、思いました。

第24回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 2年 佐藤 愛翔^{さとう あいと}

皆さんが思う平和とは何でしょうか？私が思う平和とは戦争や紛争がなく、地球上に住むみんなが平和で安全に暮らせることだと私は思っています。しかし、今の現状を見てみると各地で内戦や戦争が起きており、例えばウクライナ侵攻やガザ紛争、シリア内戦などあげればきりが無いほどに各地で戦争や紛争が起きており、その地域に住んでいる人々に危険をもたらせています。その地域に住んでいる人々はまともに安心して暮らすことができず、食料や教育、医療などもまともに受けられる現状ではなく、戦争によって多くの人たちが命を落とす原因となっています。しかし今の私達はどうか？今の日本は毎日帰る家があり、毎日ご飯を食べられ、ちゃんとした教育を受けられ、毎日仲の良い友達と遊んだりしゃべったりすることが出来ますよね。でも日本も一昔前までは戦争をしていました。その頃の日本は今の状況とは全く違い戦争末期になると、ご飯が食べられなくなっていき、今は当たり前の人権というのがありますがその頃は人権侵害が起こっていたとされています。今では自分の意見をはっきりと言う事が出来ますが、戦争をしていた頃は戦争はやめろなどの否定が出来ませんでした。今の日本は嫌なことは嫌とか自分の意見はちゃんと言えますよね。だからこそ今の私達は戦争の悲惨さを伝える義務があるとともに平和が一番だと訴えかける必要があると私は思います。身近な人、例えば親であったり自分の子どもだったり、どんどん戦場に足を運び大切な命が奪われていきます。もしかしたら自分が死んでしまうかもしれないそんなことを思いながら毎日を過ごしていかないといけないかもしれません。戦場に行って嬉しい人、喜ぶ人なんていないと思います。ただ自分の国を守りたい、自分の大切な人や親を守りたいから戦場に行く人はいるかもしれません。しかし、それは戦争が起きなければいいだけです。誰も戦争なんて心から望んでいません。しかし、幸いなことに今の日本は憲法第9条に書いてある通り平和主義です。でも他の国々から戦争をしかけられたら日本も戦うしかありません。戦争は一瞬にして色々なものを奪ってしまいます。それが例え違う国の人たちでも考えている事は同じだと思います。今当たり前に出来ている事が戦争が起こったら当たり前じゃなくなるかもしれません。もしかしたら今の私たちは平和ボケしすぎているのかもしれません。平和な状況が当たり前だと思っていないませんか？でも何かが起こってからでは遅いのです。みんなが戦争に関心であればだめだと思います。身近なところで何かが発生しないと危機感が出にくいかもしれません。戦争にはメリットはありません、ほぼデメリットしかないでしょう。戦争が起きる

理由は様々ですがみんなが思うことはひとつです。今までの生活が一瞬にして奪われ当たり前の事が出来なくなってしまう。戦争は絶対にやってはいけません。

この作文を読み改めて戦争について考えてくれたら私は嬉しいです。みなさんが思う平和とはなんでしょう、一回家族などと話し合ってみたら何かに気づいたり、何かが変わるかもしれませんね。私は戦争は絶対にやってはいけない行為だと思います。

第24回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 2年 田中 ^{たなか} ^{はるま} 陽真

平和と戦争は、対義語として扱われることが多いがこれは平和の基準で少し変わると思う。主に国家間の平和、個人の心の状態における平和、国家内における平和の三点だと考えたので、これらについて私の思ったことを書いていきたいと思う。最初に国家間の平和についてだが、これは、戦争で間違いないと思う。なぜなら、国というのは、国民がいないと成り立たないのに国民を削って戦うことや、国の発展が資源や財産などを戦争に使わなければいけなくなるので著しく低下する可能性があるからだ。だが国の発展が低下しても世界的に見たら飛躍的に向上したものもある。例えば外科手術やインターネットなどが挙げられるが、このような理由があろうとも平和の対価として戦争を正当化できるものではないと思う。戦争は、犠牲や破壊があまりにも大きすぎる。いくら外科手術のレベルが上がってもいくらインターネットが使えるようになっても壊れた自然やこれからを担う若者の命は、戻って来ないのだから。次は、個人の心の状態における平和についてだ。これに対する対義語は、戦争というよりは不安になると思う。たとえ戦争が行われなくても事故・病気・災害・人間関係のトラブル・社会的プレッシャーなどで人の心は、簡単に揺らいでしまうからだ。つまり戦争は不安の要素にはなるが不安そのものにはならないからだ。今書いたように、心の平和というのは個人的要素が強いならこれから解放されるには、どうしたらよいかそれは至って簡単だ、不安なことを紙に書けば良いこの方法は、デール・カーネギーやアンネの日記で知られるアンネ・フランクなどが使っていた方法だ。不安なことを紙に書くことによって自分の今の状況、不安の根本、不安を処理する優先順位などが可視化されることにより不安の正体をはっきりしたり、不安が思っていたよりも少ないことに気づき気持ちが前向きなる。また身体を鍛えることも重要だ。精神と体は密接に関係している。そのため、規則正しい生活・適度な運動・バランスのとれた食事を取ることで安定した精神の基礎になる。ちなみに、戦争はよって PTSD などの精神病的理解が遅れたといわれていることは許しがたいことだ。三つ目は、国家内における平和を考える。このことに関しては、対義語なしに考えたいと思う。国内における平和とは、単に暴力がないことだけではなく、人種差別や貧困問題が無く整った教育環境・正しい情報の流通が確保された環境があることが私の考える国内における平和の条件だと考えた。それもそうだろう肌の色や言語が違っただけで嫌悪されたり、明日食べる飯がない、学校に行く学費がない、学校に行っても落ち着いた環境で勉学に励めない、SNS を見れば偏った思想ばかり流れてくる。こんな環境

でこの国は平和ですなんて言えるわけがないだろう。ならどうしたら良いのか一つ目は、気づくことだと思う。差別や偏見を自分には、関係ないと思わず生まれた環境が違ったら自分そうになっていたかもしれないと思い近くでそのような行為が行われていればできる範囲でよいから偽善と思わず手を差し伸べたり、今見ている情報が正しいのかどうか疑ったりすることが大切だ。そして、教育も非常に大きな影響力を持っていると感じる人は学ぶことによって視野や価値観が広がり、嘘を見抜く力もつく。そのため、教育の機会を奪うことは、その人に多大な影響をもたらすことを受け止め全国民に正しい教育の機会をもたらすことが大切だ。最後に、平和というのは単純に見えていろいろな視点から見ないといけない複雑なものなのである。国家間の平和については、戦争が一番の脅威であり、多くの人の命と膨大な自然が消滅してしまうため何としても阻止しないとけないものだ。個人の心の平和は、戦争だけではなく日々のストレスや社会的プレッシャーによって簡単に揺らいでしまうほど繊細であり、国内の平和は、暴力の有無だけでなく差別や貧困・教育格差・情報の偏り、などの問題を解消する事によって実現されるものである。そして、私たち一人ひとりが気づき行動することにより戦争を防ぎ、平和な世界を作るためには大切だと思う。

第24回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和について

北海道釧路工業高等学校 2年 木村 琉聖^{きむら りゅうせい}

皆さんは戦争と平和について考えたことがありますか。私は社会や道德の授業でやっている時以外あまり考えたことがありませんでした。ですが今回、私は平和の主張コンクールという機会を設けて、平和と戦争について改めて考えることにしました。みなさんもこの原稿をみて戦争と平和について触れる機会が増えたらいいと望んでいます。

では少し今起こっている戦争について触れていきたいと思います。約三年前から始まり、今は停戦していますがロシアとウクライナの戦争がはじまりました。戦争の理由は、ロシアが安全保障上の脅威とみなしている NATO にウクライナが接近した姿勢を見せたことからロシアが強く反発し戦争に発展しました。NATO は冷戦時代にソ連に対抗するため、西側の国と団結したところからきました。ロシアが脅威とするのはよくわかりますが、NATO は今、加盟国の防衛、軍事訓練や共同演習、平和維持活動を行っています。NATO にウクライナが参加するならより世界で平和が広がっていくことになり今の世界に必要な存在となるはずです。ですがロシアは NATO が自国に迫っていると思っているため、先程も申したようにロシアはウクライナに強く反発しています。そしてその戦争の影響によって出た死者数は約 90 万人にも達します。約 90 万人の死者数を出した上、戦争によってうけた影響はウクライナ、ロシアだけでなく世界に影響をもたらしています。

ではロシアとウクライナの戦争を参考に戦争と平和について触れていきます。今国連や NATO、アフリカ連合、欧州連合、NGO などが平和維持活動を行っています。そのなかで、今戦争することで果たして平和が生まれるのでしょうか。少なくとも私はそうは思いませんでした。むしろ平和から遠ざかっていると感じます。もし、戦争をすることにより平和が生まれると仮定しても今現在で死傷者数は約 90 万人います。戦争により人が亡くなる、怪我をする、後遺症が残る。さまざまな要因があるうえ、平和を提唱するのはお世辞にも無理だと思いませんか。戦争をして平和を求めたりするのであれば、はじめから人を失わず、解決する方法があったはずです。そのことをせず武力で解決するのは平和ではなく抑制ではないのでしょうか。私は戦争は基本的に抑制させることがメインだとは思いますが、先程も申したように国連や NATO など平和維持活動が続いている組織はたくさんあります。その中で戦争をしてまで抑制するより、肩を並べて支え合っていくのが今の世界に求める平和だと思います。

これまで話してきて、私は平和と戦争について自分の意見や、今起こっていることに

ついてたくさん述べて来ました。そして私はこの原稿を読んだ読書の方々に伝えたいことがあります。それは今起こっている戦争は私には関係ない、と思うのではなく身近に起きていることだと感じてほしいのです。現に影響が出ているのはロシアとウクライナだけでなく、私達が住む日本でも影響が出ています。私達には関係ない、戦争なんか勝手にやっている、そう思わず身近に捉え、世界の出来事にも触れたり、この原稿で触れていない平和と戦争について色々考えてほしいと思います。私の主張はこれで終わりです。読んでいただきありがとうございました。

第24回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 2年 なかむら 中村 しょう ま 翔馬

戦争と聞くとあまりいいイメージを持つ人はほとんどいないと思う。確かに過去におきた戦争では多くの人が犠牲になり、人類が歴史に刻んだ大きな黒歴史だ。しかし、現在も戦争が起きている国があるのはなぜだろうか？戦争は何も生まれない、戦争は歴史の中でなぜ無くならなかったのだろうか？きっと科学的には証明できないもの関わっていると私は考えています。人類は、いや、すべての生物は誕生してから生きるために必要ないもの、自分の命にリスクがある機関は時間をかけてすべて淘汰されてきました。戦争も多くの命が犠牲になっていったのになぜ人々は今も争ってきているのだろうか。私の考察では感情が深く戦争と関係しているのではないかと考えた。きっと戦争の中でそれぞれの感情や考えがぶつかりあって戦争が起きているのではないかと思っている。それぞれが正義だと思って自分たちを正当化して話し合いもしないで、武力で自分たちの正義を主張しているのが戦争だと私は考えました。なら戦争がない世界が本当の平和と言えるのか。それは大きな間違いだと私は思っている。私が考える平和はただ時間と変化に身を委ねるのが一番の平和だと考えました。何も起きず時間とともに変化していく環境、そしてすべての生物たちを受け入れていく、ただ生きていくには必ず争いや犠牲が必要になってくる、しかしそれらの犠牲は必要なものであって無意味なものではない。平和とは生物が生きていくために犠牲が必要不可欠なものであって、必要のない犠牲、いわばただの虐殺は平和とは言えないと私は考えました。きっと感情がある限り完全な平和が訪れることはないと思います。感情的に人は生きるものです。人による感情、気分によって必要のない犠牲は今後なくなることはないでしょう。しかし感情は私達が生きていくには必要不可欠なものです。なので、感情も自然の摂理として考えられます。戦争がなくなることも完全な平和が訪れることはおそくないでしょう。しかし完全に戦争をなくすことができなくても、起きないように抑えることができます。誰もが争いを望んでいるわけではない、きっとみんな平和を望んでいる。それなのに歴史上で戦争は何度も起きてたくさんの犠牲者が出てきている。戦争も自然の摂理だと考えていかないといけないのか、正義という綺麗事によって戦争が正当化されているのか、この問題は他人事で済まされなくなっている。私たちが生きている現代でも戦争は起きている。いつか私たちも戦争に巻き込まれるかもしれない、巻き込まれないためにも今後戦争について一人ひとり考えて行く必要があると思う。今も大切な人、もの、場所が戦争によって壊されている。私は戦争は何も産まないただ大切なものが壊されてい

く行為だと思っている。私達は綺麗事を言っている場合ではない。歴史を振り返り戦争が二度と起きないように対策していくこと、そして戦争の悲惨さを後世に伝えていくことが平和な世界に繋がっていき無意味な犠牲がなくなっていくと私は思っています。

第24回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路工業高等学校 2年 佐藤^{さとう} 柚月^{ゆずき}

最初は私が思う戦争について話していきたいと思います。まず戦争がある方がいいか、ない方がいいかと二択を選ぶとしたら、私はある方がいいと答えます。その理由としては、まず戦争がなければ、今の日本の経済の状態、日本の在り方が大いに違ったのではないかと思ったからです。一つの例として一昔前の日本は大日本帝国という国でした。ですけど、今は日本という国名に改名されています。そのきっかけは第二次世界大戦で大日本帝国が連合国軍に降伏したことがきっかけでした。それによって大日本帝国は日本へと改名されました。その上、大日本帝国憲法は日本国憲法へと変わりました。以下の例としても戦争がなければ、もしかしたら今現在も私たちの国名は大日本帝国だったかもしれません。その上、軍事費の増大に伴って国民が貧困に陥っていたかもしれません。そう思うと私は戦争などのきっかけがあったからこそ今の日本という在り方があったんじゃないかと感じます。ですが戦争になると人の死や代償がつきものです。それによって世論の人々は戦争反対、戦争反対と言います。もちろん、人の死は戦争をする上で最小限に抑えたいと思います。ですが、今の世の中でまったく戦争が起きていないかと言われるとそうではありませんよね。今現在もロシアとウクライナで戦争を未だに続けています。その中でまた世論の人々は、**NOWAR！NOWAR！**と戦争反対という意見を言っています。それを私たちはテレビなどでよく聞いたと思われます。これもやはり戦争を止めてほしいという意見がほとんどです。ですが、その戦争について、より深くどんなきっかけで起こったものかと見てみると、ウクライナは、もともとロシアと親しい関係でしたが、ウクライナは **NATO** へ加入したいと考えていました。ですが、ロシアは **NATO** との関係があまり良くなくロシアはウクライナに反対していましたが、それに対してウクライナは反発してしまいロシアは納得出来ず致し方なく、戦争をウクライナに仕掛けたことがきっかけでした。以下のことから先ほどの話していた第二次世界大戦のことをまとめるとどちらも戦争といった大きな出来事がないと、その火種となる国全体の変化は無かったと思います。以上のことから戦争というのは、ないよりもあった方がその国がより良くなっていくための変化として大事なことはないかと私はそう思います。

次に平和について私が思うことを話していきます。まず私が思う平和は、争いもなく、自然災害や世界中の人々の人種が平等で公平に設けられている状態のことだと私は思います。ですが、今は戦争も起きているし、自然災害は地震や津波、台風などといった

ものは時が来れば来るものですし、世界中の人々の人権が平等で公平については、例として今も北朝鮮やエリトリアのような職業選択の自由のない国としてのカースト制度などが挙げられます。以下のことから、どれも私が思う平和にはなっていません。そこで私以外の身近にいる友人に「平和とはどういうものだと思いますか」と問いかけてみました。そしたら、A君は平等や公平、男女差別がないことと答えていました。そしてB君はこの二つの意見もカースト制度などのある国が例として挙げられているため、それぞれの自分が思う平和に至っていないと思いました。以上の私の意見と友人の意見をまとめて思ったことは、恐らくこの世の中に平和というものは、ほぼほぼ存在しないものではないかと思いました。それはやはり時間が経過するとともに何かしらの変化が連続的に起きて平和というのは瞬く間すぐ消えてしまうからだとは思っています。

以上で戦争と平和についての話を終わります。

第24回平和の主張コンクール

佳作

平和と戦争

北海道釧路工業高等学校 2年 ^{かわもと}川本 ^{そうや}創也

私は、こういうのを中学校の道德の時間以降考えてこなかったです。そんな、私が思う「平和と戦争」についてです。

まず最初に戦争について思うことです。現在、多くの国で戦争が起こっています。アフガニスタンや特にウクライナとロシアの戦争が有名で二〇二二年から現在も戦争が続いています。この戦争の原因はロシアがウクライナの NATO の加盟を阻止するため、ロシアとウクライナは歴史的に深いつながりがあって、ロシアは NATO の東方拡大を脅威と認識して、そんな事があってウクライナに NATO に加盟してほしくないからこの戦争が起こった。そもそも、NATO って何と思われるかもしれないので NATO の紹介をさせてもらいます。

NATO とは、北大西洋条約機構（North Atlantic Treaty Organization）の略称で、一九四九年に設立された軍事同盟です。加盟国同士が互いに防衛し合う集団防衛の原則を持ち、冷戦時代にはソビエト連邦に対抗する役割を担いました。

ウクライナとロシアの戦争によって、東欧諸国の NATO 加盟希望が高まっています。そして、なぜロシアは NATO を脅威だと感じているのか私の言葉でまとめてみました。NATO の加盟国は、中東一カ国、北米二カ国、欧州二九カ国の計三十二カ国で NATO 加盟国の軍隊を合わせると、約三五〇万人の兵士と職員を保有する。二〇二〇年時点の軍事費合計は、世界の名目総額の 57% 以上を占めているからだと思っています。

これに対して、戦争はいろんな理由で起こってしまうのだなと思いました。ウクライナとロシアの戦争では、ウクライナの NATO の加盟を脅威と感じて戦争が起こってしまう。

それでも、戦争はしたらだめだと思う。なぜなら、戦争は多くの人の命を奪ってしまうからで、他の解決方法があると思うから。

次に平和について思うことです。私は、今回、初めて平和ってなんだろうと考えました。私が思ったことは、平和な国なんてどこにもないと思います。まえまでは、日本は「時間に厳しい国」だったり「おもてなし」とか言われてました。でも、今の日本の政治は正直嫌いです。今の日本政府は、税金で国民からお金を取りすぎていると思う。だって、物価高なのに増税は簡単に上がっていくのに対して、減税だったり、給料の上がるのが遅くなったり、アルバイトの給料の上限が一〇三万円までということ、それを超

えてしまうと税金が課されます。一〇三万円を例に一〇三万円を超えたら約八万五千円取られてしまいます。そのせいで、万引きや闇バイトをせざるをえない状況まで追い詰められて、犯罪まで手を出してしまう事が増加しているということが起きている。

このことから、私は今の日本政府は嫌いです。会議中に寝てお金をもらっていること。でも、日本の文化や料理、四季は好きです。

私の思う「平和と戦争」について、お時間を取ってご覧いただき。ありがとうございます。

第24回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和について

北海道釧路工業高等学校 3年 伊藤 歩夢^{いとう あゆむ}

必ずしも戦争がなければ平和であるとは言えない。

戦争とはどこかでその人間たちのタガが外れて初めて起きるのである。

戦争は数多の人間を不幸にし、ごく僅かな人間に富や力を与えられることが出来る。それによって戦争のサイクルは回る。停戦というのは史実として存在するが結局は勝者と敗者を決めるだけであり、負ければ全て奪われてしまう。ただし、戦争によって救われる人間もいる。

日本人である我々には馴染みないが戦争で衣食住を完結する国だって確かにあるかもしれない。だが結局は日本は戦争事に関与が難しく、我々はどれだけ慈しもうとも考えようともただの傍観者でしか居られないのである。それではどうすれば平和は訪れるのだろうか、自分は人類には大きい問題が必要だと思う。一つの問題、強敵によって人類が危険になった時絶滅してはどうしようもないためそこで初めて、絶滅が起きるのはまずいという共通理解が始まることにより人類は一致団結するのである。数年前に始まったコロナウイルスにより国内、国内外問わずパンデミックが起き医療崩壊、飲食店などの仕事を行う者たちが次々と失業していく時代にとってもつらい日々を過ごしていた。これに対し先進国の国連が先陣になりなんとかワクチン完成までの時間を稼いだ。この間には今も続くウクライナとロシア間の戦争は遭ったものの各国が団結して居たかと思う。

ここで大事になってくるのは全てにおける共通認識と共通理解だと思う。今この行動を起こすことによって後で面倒なことになるよな、これをしたいけど少し危ないからやめておこうという未来を考える力である。これは法の力によって我々市民は律されていて、「自分は人を害したりしない、だから他の人から害してほしくない」という安全を保障することを担保に行動を制限されている。パンデミックの最中に戦争なんて起きてしまいそれによって国が再起不能になってしまっただけでドミノ倒し方式で人類は滅亡してしまうからである。何が火種になるかわからないのに戦争を起こす統治者達は自分勝手であり到底許されるはずがないのだ。この者たちを断罪しない限りは、味を占め他を顧みることが出来ずにさらなる怨恨をもたらすのである。

ただ、だからといって戦いで終わらすことが解決ではなく皆で手を取り合う方法は必ずあると私は信じている。例えば戦争で決着を決めるのではなくスポーツを行いその結

果で決めることや昨今では e スポーツも話題となっており疑似的な戦争シュミレーションを再現することも可能であると言える。戦争が起きてしまうのは不可避の事実でありその歴史は巡るが、せめて血を流すことのない笑いが生まれ支えあう戦争に変わる事自体は出来る。

結局の平和は誰も血を流さず人々が笑い続けることが平和だと思う。そのためには共通認識等々のことを話したが要するにあたりまえのことさえ出来ていれば何ら戦争が起きる心配などする必要がないわけである。そこに言語の違いや地域、国差などはあれども本質自体は決して不変である。地球はもう少しもしたら崩壊してしまい何処かの星に人は移住するかもしれない、そうしたらきっと人類は大きな計画を立ち上げるだろう。自分たちが生きてるかは定かではないがその時がきっと僕らの転換期になることを祈っている。

第24回平和の主張コンクール

佳作

無理難題

北海道釧路工業高等学校 3年 ^{とがわ}十川 ^{かいと}該大

戦争と平和は「現実」「理想」ぐらいわかりやすく対比していると思います。

戦争は現実、平和は理想。平和を実現することは、人類の理想であって人類全てが手を取り合い密になって目標に取り組むしかありません。集団やましては一個人が叶える問題ではないと思います。

戦争をやめ平和になるためには、私はまず言語の統一化を図ったほうがいいと思います。戦争には「言語の壁」があると思います。そのせいでまだ話し合いもせずに戦いが始まります。国の一番偉い人やそれに携わる人はもちろん話し合った上での戦争かもしれませんが国民一人一人の意見、話し合い、そして互いの国の国民達の会話は取り入れたり対話していたのでしょうか。本当にその戦争が必要だったのでしょうか。私は一人一人が話し合えるならば戦争なんて起きないと考えます。どんなことでも多くの意見、多くの観点から物事を捉える事が必要であります。そうすれば必要悪があれども「戦争」殺し合いなんてことは起こり得ないと思います。ですが、何億と膨れ上がった人口に「対話」なんてものは不可能、やっぱり理想です。今、必要とされているものは「対話」ではありません。それは「巨悪」なのだと思います。「巨悪」は大きな悪の政府というわけではありません。大きな影響力がある悪、大きな恐怖。などのような意味です。

抑止力といっても差し支えないです。もっとわかりやすく言い換えるなら「核」です。核の威力そしてその影響力は、きっと第二次世界大戦が終わった一九四五年から今日の二〇二五年の八十一年間を大戦もなく安寧とは名ばかりな平和を作ってくれています。第一次は一九一四年に始まり、第二次は一九三九年に始まっています。たった、二十五年で再び戦争は起きてしまいました。それは、「巨悪」がなかったからでしょう。

世界大戦だけに目をむけているわけではないですが、やはり第二次世界大戦では三〇〇万人もの死者を出しました。また世界最大の死者が出たのも争いで中国の安史の乱です。三六〇〇万人もの死者がでました。世界最大の災害であっても死者は三六〇万人です。争いがなければ少なくとも一〇〇〇人もの死者は出ません。「巨悪」があれば争いは起こり得ないと考えますが現在の「巨悪」代表の核は影響力を失ったのか十年後には第三次が起こると多くの専門家は予想しています。第三次は核戦争になり、地球には大きな取り返しのつかない被害を受けて、そして人類は多くの死者を出します。核戦争の最後に勝ち取った不毛の大地では移住問題や資源不足などさらなる問題が出てきます。

また、争いそしてまた争い、もしかしくても戦争はなくなるのかもしれませんが。「戦争」や「争い」はもっとも「人間」に似つかわしい言葉なのかもしれません。そして、「巨悪」とは非常に不安定ではありますが、その代わり大きな影響力を持っています。今の核はとても怖いのです。怖くてたまりません。ですが「核なんて落ちてこないでしょ」なんて考えがあり、それが現実味を薄れさせていきます。

もしかしたら、こういった現実味のない大き過ぎる「巨悪」は時間が経つに連れその影響力を失うのではないのでしょうか。はじめはその被害に慄き再び起きることを避けようと対策するが時代が進み、技術は発展してゆき少なくとも餓死や争いが身近では起きない人々達は死自体にも恐怖心は薄れ対策が対策ではなくなったとき二度と起こってはいけない核の被害がもう一度起こり実際に感じて、見て、再び「巨悪」を恐れる。核は「巨悪」にはインパクトがすごいがあまりにも強すぎて現実味に欠けます。核は戦争の兵器すぎるのです。そうではなく戦争を無くす兵器を作れば良いと思います。ただ威力の強さではなく身近な恐怖である必要があると思います。戦争を起こしてはいけない、そもそも悪事を行ってはいけない。そう思わせるような兵器またはルールでもいいでしょう。悪事を起こしてしまえば、自分は罪を償う必要がある。そう思わせるような絶対的な力であればいいでしょう。とにかく、大きな支配力がある何かが必要です。「巨悪」または「ルール」、「思想」などであれ悪事をしてはいけないのだから戦争を起こしてはいけないという大きなプレッシャーが必要です。そうなればいよいよ平和が成り立ちます。だが、それがなければ簡単にいえば戦争は起きてしまいます。ですが、もしかしたら止まらない争いのなかに、既に平和は常にあるのかもしれませんが。実際には私は、今は間違いなく平和に生きているでしょう。私より、もっと裕福な人は同じく平和だと感じています。そして、もう少し貧しい国であっても遊んだり、ご飯を食べたり、寝たりと幸せと感ずることがあるならば生活が苦しくてもその人からしたら平和な日常なのかもしれません。幸せと感ず未来を感ず生きていることが個人の平和といえるのならば理想に近い平和も届く事のできる目標に変わるかもしれません。

世界の平和と個人の平和、どちらも同じ平和。争いがなくなれば世界平和！そんな単純なことではなく考え的には世界が幸せに溢れ未来あるビジョンが見えていけばそれは、平和なのだと思います。紛争など世界でまだ争いは絶えませんが個人での平和を持つものが少しその平和を分け与えられた個人の平和は増えていき、いつしか世界中が個人の平和を持ち合わせた未来のビジョンを描いていると願います。

まとめとしては、止まらない争いにより美化されすぎた平和は大きな力によって支配されなければならない。安全地帯にいる私達は「巨悪」によって作られたぬるま湯の平和に肩までどっぷりと浸かっているため私を含め個人の平和で満足していること。極論、平和の世界を作るには人がいなくなるしかないことです。ですがそんなことはありえないので、無理です。ほぼ矛盾です。「戦争」と書き「ヒト」と呼ぶぐらいにはヒトと戦争は切っては切れない関係なので。「戦争」の対義語が「平和」なら「人間」の対義語

も同じく「平和」です。